

中国の沿海地域の都市住民のライフスタイルに関する調査研究 —寧波（ネーハ）市慈溪（ツーシ）地区の事例—

魯 姍 丸山富雄

キーワード：ライフスタイル, 余暇, 消費, 中国沿海地域,

The lifestyle of CI XI citizen in NING BO City

Ro San Tomio Maruyama

People in China were liberated from the ideology, and came to have interest in the lifestyle with economic development. Now, the problem of the lifestyle is a shared task also in China, Japan, and the world.

This research aimed to extract the feature of Chinese's present lifestyle from the previous work, and to clarify the lifestyle of residents in the coast district (CI XI citizen in NING BO City) which is the most economically developed region in China.

Key Words: lifestyle, leisure, consumption, the coast district in China

I. はじめに

1. 中国におけるライフスタイルの歴史的変遷とその背景

中国における「ライフスタイル」の出現は、「階級闘争」および「経済建設優先」による社会の比重の変化と相関する(趙紅梅、2004)。近代技術文明は物質財貨を創造し、人々の生活水準と生産条件を改善すると同時に、人々の生きる世界も変えていった。中国では、改革開放政策前までは、人々の関心事は階級闘争であり、自分のライフスタイルどころではなかった。たとえ人がライフスタイルのことを言及しても、それは決してよい意味ではなかった。例えば「小市民の生き方」のように使われていた。

改革開放政策後は、人々はイデオロギーから解放され、生産資源の私有化に伴い新たな労働観を持つと同時に、ライフスタイルにも関心を寄せるようになった。人々は大胆に生活を議論し、生活を享受し、また生活を美化し、さらによりよいライフスタイルを期待するようになった。ライフスタイルの在り方は、いまや中国でも日本でも、また世界でも共通の課題である。

表1は、中国の建国以来の社会変化と発展を示したものである。

表1) 中国建国以来の社会変化

1949年	中国建国、中国国内の政治混乱の時期
1958年	大躍進 (1958年に毛沢東が発動した、工業、農業などの飛躍的な発展をめざす社会主義建設総路綫の運動)
1959年	1959年から1961年までの干ばつによる三年自然災害 (自然災害と人為的な災害 (政策の間違った、すなわち大躍進期間の政策混乱によって、農業の荒廃を招く結果となった。食物不足と大衆の餓死者を生み出す)
1966年	1966年5月から1976年10月までの文化大革命 (約10年間続いた大規模な政治運動、現在は「十年政治大災難」などと呼ばれ否定されている)。
1977年	1月、毛沢東死去。これまでの27年間は、政治の不安定と混乱により経済発展はすべて停滞した。人々のライフスタイルの中心は衣食の満足だけであった。
1978年	鄧小平が改革開放政策を提案。ここから中国の新しい時代が始まる
1979年	国民経済の調整により農業政策が回復する
1984年	中国沿海部の都市から経済開放特区を設立する
1989年	中国西部大開発戦略を確立、経済発展の中心が沿海部から中国中心部へ変わる
2001年	世界貿易機関 (WTO) に加入
2002年	衣食問題が解決し、小康 (家の経済状態が裕福である) 社会へ発展する

現在、中国は伝統社会から現代社会へと大きな変革期の時期にある。肖 (2003) は、現在の中国を「改革開放以来 30 年を経て、東西文化がぶつかり合い融合している時期」と指摘している。同時に中国社会に次の二つの転換の契機を呼び起こした。

一つは、「精神的豊かさの追求」である。つまり、人々の目標が、物質的充足の追求から精神的充足の追求へと変化したこと、すなわち、生活における量から質への転換である。もう一つは「高度成長における矛盾」である。産業優先、経済価値至上による高度成長追求の姿勢が、中国の社会全体の中で、さらには国際社会の中で、バランス感覚を欠いた行き方をもたらし、結果として過度の開発問題、公害問題、収入格差問題、社会福祉問題、人口問題などが生じた。激しく変動する社会の中で、中国都市部の人々

のライフスタイルも日々変化している。過去における単純に衣食住の満足を求めることから、物質および精神的な満足を求める時代の到来である。すなわち人々の衣、食、住、行（交通手段）、学習、余暇娯楽への欲求が新たな時代を迎え現在も継続している。

2. 研究目的

中国の国土は広大で、また約 14 億人の多民族国家である。現在、大都市と農村部では様々な面で大きな格差や貧富の差があり、人々のライフスタイルも大きな違いがある。本研究は、現在の中国人のライフスタイルの現状に関し、経済発展の最も進んだ沿海地域、寧波慈溪地区住民のライフスタイルの実態を研究することによって、現代中国人の最新の生活意識や価値観、余暇観さらには課題を明らかにし、さらに今後の発展の趨勢を予想できると考えた。

II. 中国人のライフスタイルの現状と諸特性

1. ライフスタイルの定義

ライフスタイルには狭義と広義の定義がある。狭義のライフスタイルは、消費の方法を指す。本論では、広義のライフスタイルの定義を用いる。広義のライフスタイルは、人々の衣、食、住、行、労働、余暇娯楽、社交など、物質と精神生活の価値観、道徳観、審美観であり、特定の歴史・社会的条件下における各民族、階級、そして社会階層の生活様式である。ライフスタイルは個人を社会化させる重要な一要因であり、個人の社会化の性質、レベル、方向を決定する。ライフスタイルは歴史的概念であり、社会の発展によって変化する（李諺和、2003）。

2. 中国人のライフスタイルの現状と諸特性

現在の中国人、特に都市部の人々のライフスタイルは、伝統的ライフスタイルの基本的な特徴を継承しつつ、一連の新たな特徴も形成しつつある。ここでは、先行研究からその特徴を抽出する。

1) 消費の傾向—品質と個性の強調、物質的消費の重視、精神的消費の追求—

生活レベルの向上とともに、中国の都市住民の消費は絶えず向上を求めている。したがって、人々の消費観は「衣食の満足」から「発展型」や「享受型」と言えるものに変化している。

人々の活動範囲の拡大と経済状況の改善とともに、消費の習慣が家単位の自給自足の消費の方法から、社会全体の消費の方法へと急速に

変わってきた。消費者の心理から見れば、新しさや美しさ、名誉など、現実的な心理傾向を表現している。個性を強調し、文化などの深層の満足である。現代の中国都市住民の消費観は、物質機能と精神的な機能、実用的価値と文化的価値の統一という事ができる。

消費の重点が変わることから、これまでとは異なる住宅、交通、通信、教育、観光などの方面の経費が増えたことは明らかである。今後ますます時間の消費、教育の消費、健康の消費が増えるであろう。さらに、都市住民の勤務時間の短縮と家事労働の軽減から、人々が自由に裁量できるレジャー時間の増大によって、余暇生活もますます豊かになるであろう。

しかし、都市住民は労働形態とライフスタイルの大きな変化によって、生活リズムが乱れ、不健康な生活習慣と運動不足の状態となっている。総人口の約 63% の人は「半健康状態」であり、「生活習慣病」はもはや都市住民の看過できない問題となっている（嚴琚、2007）。中国政府は国家政策として、1995 年に《中華人民共和国体育法》と《全民健康計画綱要》を制定し、国民に余暇を楽しみ、運動やスポーツを奨励している。国民の余暇意識について、生活を楽しむ生命を尊重することは、現代人の新しい価値観になっている。また健康な体は全人的な発達のための基礎である。健康と長寿は人類の発展にとって基本的なシンボルである。先進国では、人々の余暇観は「仕事が大事」という労働価値本位から、「仕事も余暇も両者が同等に重要」という価値観に変化している。現代の中国人の余暇意識も同様に変化しつつある（曹衛、2005）。

2) ライフスタイルの個性化、多元化、国際化

中国都市住民の消費傾向は、前述のように精神的な豊かさを追求することに変化してきたが、それは都市住民のライフスタイルが個性化、多元化してきたと指摘することができる。このことは同時に、現在の中国都市住民のライフスタイルが国際的な水準となり、国際化の傾向を示している。

知識経済社会の進展の中で、都市の人々は自身の文化や教養を重視し、学習欲求が高まっている。自らの教養を高め、知識を充電する様々な機関での学習は、いまや中国都市住民のライフスタイルの一部である。都市部においては、中国も「生涯学習社会」が到来したと言える。

3) 個人的価値の重視

現在の中国都市住民の生活価値観は、集団的価値から個人的価値重視に、物質的価値から物質的価値および精神的価値両者の重視に、さらに禁欲主義から人間性価値に変わりつつある。社会主義市場経済体制が建設されたことによって、個人は封建的な倫理と権力から解放され、個人の地位が確立され、個人的な問題を解決することをより重視するようになった(肖小霞、2003)。市場経済が発展し、物財、文化財が充実することによって、人々の消費観や生活観は大きく変わり、社会的価値よりも個人的価値重視へと変わってきた。もちろん変化の中で、「享楽主義」、「金銭至上主義」などの誤った考えも出てきた。

4) 伝統思想と現代思想の過渡期

伝統的なライフスタイルは、中国の場合、儒教思想、家父長制と家族主義などと共に形成されたものである。

1982年、中国では計画出産が実施され、都市の家族構成は子ども一人の核家族へと変わってきた。同時に、西欧の極端なエゴイズムの影響を受け、親孝行の感情が薄らぎ、親族の関係や血縁関係も希薄となってきた。社会生活の変化につれて、特に西欧エゴイズムの価値観の浸透、功利主義などの思想意識が急激に膨張し、自我利益を中心とした考えも支配的となってきた(劉慧敏、2005)。例えば高齢者は働くこともなく、ただ消費するだけであり、親は厄介者であり負担であると考えたとすれば、親孝行の観念はなくなる。人々は儒教思想の「必養且敬」(必ず親を養い、さらに敬いなさい)という孝子の基準を、「必養」すなわち親を養うことのみを簡略化してしまった。社会の中で、親の扶養の義務と責任を回避し、さらに親に暴力を振うことが出現する時、「且敬」がなくとも、すなわち敬わずとも、まだ親の面倒をみている人たちが今や「孝子」になった。

中国では、伝統的儒教思想は、五四運動の新文化運動から、特に「文化大革命」の10年間の混乱時期、封建的道德観として痛烈な批判がなされた。

ただし、明確にしなければいけないことは、これら消極的(王制、階級制、宗教迷信など)といわれる要素はいずれも伝統的思想を代表するものではない。伝統的思想に対する痛烈な批判の中で、同時に伝統的思想の合理的な部分

(「存大同、求小異」すなわち中庸思想や「以人为本、人格道德為尊」という人文主義的な伝統思想)が見落とされてしまった。そうして現代人のライフスタイルにあまり良くない影響を与えてしまったのである。

王制、階級制、宗教迷信などの伝統思想は現在のライフスタイルと様々な衝突を生んだ。しかし都市部住民のライフスタイルの特徴としては、人、民主、科学、開放、自由などが指摘されている(肖小霞、2003)。現在の中国の都市住民のライフスタイルは、前に向かって前進しているが、一方ではまだ完全に伝統思想の影響からは解放されていない。思想や観念の衝突がライフスタイルの衝突の原因である。

III. 研究方法

1. 調査対象地域の概要

本研究では、調査対象地域として、中国の経済発展の最も進んだ沿海地区である寧波慈溪地区を選定した。この地区は、鄧小平の経済開放政策が最も早く行われ、30年ほど前から、かつての小漁村から全国有数の経済発展地区となった。住民の生活は農村式の生活から大都市の現代的な生活へと大きく変化した。したがって、この地区は現代中国の都市住民のライフスタイルの縮図といえる。

2007年の統計によれば、この地区の総面積は1156キロメートルで、総人口は102万7400人である。

年齢構成では18歳未満が17.4%、18歳から35歳未満が20.8%、35歳以上65歳未満が50.4%、65歳以上が11.3%であり、中年層が突出している。

2007年のこの地区のGDPは532億元(7980億日本円)で、2002年の2.5倍となっている。2006年の中国国家統計局の調査資料では、中国各地住民の一人当たりの月収入の平均は998.53元である。この中で全国第一位は北京1822.26元で、第二位の上海は1809.3元、そして寧波のある浙江省は第三位で1566元となっており、この地域は中国でも非常に高い収入のある人々が住む地域である。

2. 調査内容

1) 調査対象者の属性

2) 余暇活動と余暇意識

- (1) 平日と休日の余暇活動
- (2) スポーツ実施の頻度
- (3) 参加するスポーツ種目
- (4) 仕

事と余暇の重視度

3) 家族観と宗教観

(1) 親の扶養 (2) 宗教観 (3) 墓参の頻度

4) 消費観

(1) ローソンの利用 (2) 余暇支出

5) 生活重視項目と生活価値観

(1) 生活重視項目 (2) 生活価値観

3. 調査方法および時期

調査は、平成20年7月1日から15日の期間、地区の戸口（世帯）管理事務所の名簿より、無作為に抽出した250名に対し、郵送法によって行った。最終的に、回収数は213、回収率85.2%であった。

4. 分析方法

調査項目に関し、男女および年齢層別にクロス集計を行い比較した。さらに一部の項目に関しては、平均値による比較も行った。

IV. 結果と考察

1. 調査対象者の属性

調査対象者は213人で、男性は109人(51.2%)女性104人(48.8%)とほぼ均等である。年齢構成では、20歳代が最も多く(26.8%)、次に15歳から20歳(以後10歳代と呼ぶ)の20.2%で、やや若年層が多い。また男性では10歳代および60歳以上が多いのに対し、女性は20歳代が多くやや偏りが見られる。

学歴は、中学校卒業が35.2%と最も多く、次に小学校卒業の29.1%で、調査対象者の学歴はあまり高くない。しかし10歳代の対象者が43名おり、この中には高校生も含まれ、中学卒と回答したため、その影響で学歴が低い結果となっている。

月收入では、1000元から2000元が最も多く、50.3%を占めた。次に2000元から3000円で26.6%であった。

家族形態では、親と同居の独身(23.5%)も多いが、夫婦のみ、および夫婦と子どもという核家族が49.3%と約半数を占め、核家族化していることが分かる。

2. 余暇活動と余暇意識について

1) 平日と休日の余暇活動

平日と休日の余暇活動調査の結果は、全体的にはほぼ同じ様な傾向であった。

「家族とのだんらんを楽しむ」、「テレビを見たり、ラジオを聴く」、「けいこ事や趣味をする」

が、平日・休日とも上位3位である。また平日には「新聞・雑誌・本を読む」、休日では「ショッピングや町をぶらつく」が4位に、「友人とのつきあい」はいずれも5位に入っている。しかし休日の「けいこ事・趣味」や「ショッピング」、「友人とのつきあい」は、いずれも平日を上回り、休日にはより活動的、積極的な余暇活動を行っているといえる。

表2) 余暇活動の上位項目

	平日		休日	
1位	家族とのだんらん	57.5	家族とのだんらん	53.1
2位	テレビ・ラジオ	50.7	テレビ・ラジオ	44.9
3位	けいこ事・趣味	36.7	けいこ事・趣味	41.5
4位	新聞・雑誌・本	33.8	ショッピング	38.6
5位	友人とのつきあい	30.9	友人とのつきあい	35.3

性別にみると、男性は女性よりも社交的な活動である「友人とのつきあい」や「ゲーム」、「スポーツや運動」と答えた者の割合が多い。逆に女性は「ショッピング」や「けいこ事・趣味」が男性よりも高くなっている。

年齢別にみると、「家族とのだんらん」と「友人とのつきあい」では面白い結果となった。「家族とのだんらん」は年齢が高くなるに従い、逆に、「友人とのつきあい」は若年層ほど高くなっている。予想されたことではあるが、若者は友人と、中高年者は家族との交流と楽しんでいる。また「ゲーム」は若年層ほど、「新聞・雑誌・本」は高齢者ほど高い。さらに「スポーツや運動」は10歳代と60歳以上がよく行っていることがわかった。

本調査項目は、丸山ら(1989)の日本での調査と同様のものを使用した。そこで日本のデータと比較することにする。

顕著な箇所を指摘すると、「家族とのだんらん」や「ショッピング」、「スポーツや運動」は、日本も中国もほぼ同じ割合であった。日本人が中国人よりも高い項目は、「テレビ・ラジオ」、「新聞・雑誌・本」、「ドライブ」、さらには日本人女性の「友人とのつきあい」である。逆に中国人の方は「けいこ事・趣味」、「散歩」、「ゲーム」が日本人より高い結果となった。

全体的に日本人の方が余暇活動の回答が多く、余暇が豊かとみることできるが、「散歩」や「けいこ事・趣味」の多さから、中国人のほうが活動的・積極的な余暇活動をしていると指摘できる。「けいこ事・趣味」の内容は分から

ないが、中国人の散歩の習慣や将棋や麻雀など伝統的余暇活動の影響と思われる。

2) スポーツ実施の頻度

運動やスポーツの頻度では、「週に3日以上(年151日以上)」と答えた者の割合は16.4%、「週1~2日(年51~150日)」と答えた者の割合が26.6%で、全体で43%の人が週1日以上運動やスポーツを行っている定期的スポーツ参加者といえる。「ほとんどしない」と答えた者の割合は35.7%であった。

性別で比較すると、週1日以上では男性47.5%に対し、女性38.4%、「ほとんどしない」は男性31.1%、女性40.4%であり、男性の方が運動やスポーツをよく行っていることが分かる。

年齢別では、週1日以上の定期的スポーツ参加者をみると、10歳代(41.3%)、50歳代(60.8%)、60歳以上(69%)が他に比べよく行っている。逆に20歳代および30歳代は、「ほとんどしない」がそれぞれ51.8%、41.9%で、あまり運動やスポーツを行っていないといえる。

日本の「体力・スポーツに関する世論調査」(内閣府、2006)の結果と比較すると、全体で週1日以上と答えた割合は、日本は44.4%で、今回の中国の結果(43%)とほとんど同じ結果であった。しかし日本の場合、「ほとんどしない」は全体で25.5%(男性21.2%、女性29.3%)で、今回の調査結果のほうが極めて高く、中国における運動・スポーツ実施の二極分化の状態を指摘できる。

3) 参加するスポーツ種目

「月に1~3日(年12日~50日)」以上と答えた者に運動やスポーツの実施種目を尋ねたが、「散歩」(56.3%)、「トレーニング」(24.6%)、「バスケット」(23.8%)、「登山」(21.4%)などが多くなっている。

性別で見ると、「バスケット」、「サッカー」、「卓球」などの球技では男性が、「トレーニング」や「登山」、「踊り」などでは女性がよく行っている。

年齢別にみると、「バスケット」、「サッカー」、「卓球」などの球技では10歳代(卓球は40歳代も)が、「踊り」は40歳代、「散歩」は高齢者ほど高いことが分かる。

日本の調査結果と比較すると、今回の調査対象者には10歳代が含まれていることもあるが

(日本の調査対象者は成人)、散歩(ウォーキング)以外ではよく行われる種目に日中の違いが現われている。

全体の上位5種目は以下のとおりである。

表3) 中日のスポーツ実施上位項目

	中国		日本	
	1位	散歩	56.3	ウォーキング
2位	トレーニング	24.6	体操	22.6
3位	バスケット	23.8	軽い球技	15
4位	登山	21.4	ボウリング	14.6
5位	卓球	16.7	軽い水泳	11.7

4) 仕事と余暇の重視度

仕事と余暇のどちらを重視するかを聞いたところ、「仕事」と答えた者の割合が62.0%、「余暇」と答えた者の割合が38.0%となった。性別では、「仕事」が男性64.2%、女性59.6%で、男性の方が仕事重視派が多い。年齢別にみると、「余暇派」は若年層ほど高く予想どおりといえる。

日本の「レジャー白書」(2008)の余暇重視派は35%で、今回の調査対象者のほうがやや高くなったが、ほとんど変わらない結果であり、中国の都市住民の余暇観は日本人と変わらないと言える。

3. 家族観と宗教観

1) 親の扶養

親の扶養について聞いたところ、「親への感謝や愛情の気持ち」とする者の割合が54.0%(男性47.7%、女性60.6%)、「義務」41.8%(男性50.5%、女性32.7%)、「仕方がない」は全体で4.2%と非常に低くなった。女性は男性よりも「親への感謝や愛情」によって扶養しようという気持ちが強いことがわかる。

年齢別にみると、「親への感謝や愛情の気持ち」とする者の割合は20歳代から40歳代で強く、「義務」は10歳代および奇妙なことであるが50歳代以上が強くなっている。「仕方がない」も50歳代が突出している。恐らく50歳代以上の人は、現在、親の扶養をしている人が多く、現実的な回答になったと思われる。

中国伝統儒教の思想である孝子は、前述のように「必養且敬」すなわち「親への感謝や愛情の気持ち」であるが、現在は「必養」に簡略化した「義務」と「仕方がない」が指摘されている。今回の調査結果においても、伝統的な「必養且敬」思想をまだ持っている人の割合は54%で、簡略化した人の割合が46%と半々となった。中国の伝統的な美德や良さも失われていく傾向がある。

2) 宗教観

宗教に対する熱心度を聞いたところ、「非常に熱心」と「まあまあ熱心」と答えた者の割合は52.5%、「あまり熱心ではない」と「熱心ではない」をあわせると47.5%であり、ほぼ半々となった。

性別では、「まあまあ熱心」以上と答えた男性の割合は50.4%、女性の割合は54.8%となり、やや女性の宗教心が強い。年齢別では高齢者ほど宗教に熱心であることが分かる。

墓参りの頻度を聞いたところ、「毎年、必ず行く」は54.9%（男性59.6%、女性50%）、「2、3年に行く程度」25.4%（男性22%、女性28.8%）となり、かなり熱心であるといえる。性別では、男性の「毎年、必ず行く」がやや高いが、男女でほとんど変わらない。年齢別では、前問の「宗教観」同様、高齢者ほど「毎年、必ず行く」の回答が多くなっている。

4. 消費観

1) ローンの利用

ローンの利用について聞いたところ、「利用している」人は全体で7.5%と極めて低く、「今後利用」も26.3%であった。全体で半数以上が「今後も利用したくない」と答えた。中国ではまだローンが普及していないことがわかる。

性別ではほとんど差はなく、年齢別では出費のかさむ40歳代で「利用している」「今後利用したい」がそれぞれ25.9%となり、あわせて5割を超えている。また10歳代、20歳代の若年層では「今後利用」の比率が高く、中国においても今後ローンの利用が増える予想される。

2) 余暇支出

余暇の支出について聞いたところ、「余暇支出には多少無理をしてもかまわない」が38.5%（男性35.8%、女性41.3%）と最も多く、男女共に中国都市部の人々の積極的な余暇観がみられる。「無駄づかい」と答えた人は22.5%（男性24.8%、女性20.2%）と少ない結果となった。

性別では、女性の方がやや積極的である。また年齢別では40歳代まではほとんど変わらず積極的であるのに対し、50歳代以降は余暇支出に消極的であったり、「無駄づかい」と思う人の比率が高くなっている。

5. 生活重視項目と生活価値観

生活する上で、仕事、遊び、金銭、家族、友

人の5項目の内、どれを重視しているかを聞いたところ、第1位に上げた項目では「家族」が60.6%（男性56%、女性65.4%）と男女、年齢別でも他の項目を圧倒している。次は「金銭」、「仕事」がほぼ同比率であるが、「仕事」は男性がかなり多くなっている。

年齢別にみると、60歳以上の高齢者で「家族」の比率が低くなり、「仕事」や「遊び」の割合が高くなっている。恐らく伝統的な仕事観や自由時間での「遊び」を重視している現われと思われる。また「友人」は10歳代の若者の多くが指摘している。

次に重視する項目の「第一位」を5点、以下「第五位」を1点と得点化し、平均値を求め、比較を行った。

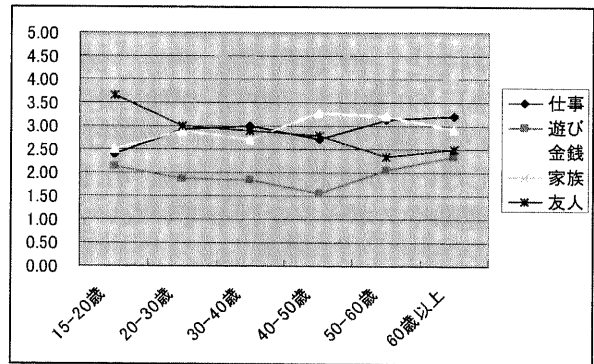


図1) 生活重視項目 (平均点)

全体では、「家族」3.97、「仕事」3.22、「金銭」2.93、「友人」2.50、「遊び」2.34の順であった。

いずれの年代も「家族」が1位であるが、10歳代では「友人」がかなり高く、その他の項目はほとんど重視されていない。20歳代、30歳代は同じような傾向で、「家族」の次に「友人」、「仕事」、「金銭」が約3点で並んでいる。40歳代では「金銭」が高くなり「遊び」が極端に低くなっている。50歳代以降は「仕事」、「遊び」が高くなっている。

2) 生活価値観

日下ら(1988)は、生活価値観に関する調査から、「自己充足・リラックス型生活価値観」、「主体性・積極型生活価値観」、「伝統志向型生活価値観」の3因子を抽出しているが、本研究では、最も代表する以下の質問項目によって、それぞれの生活価値観を計った。

①自己充足型生活価値観

「ぜいたくはできなくとも、気ままに楽しくくらしればよい」

②主体性型生活価値観

「世の中のしきたりと違っても、自分の信念に従って行動するほうだ」

③伝統志向型生活価値観

「家族がうまくいくためには、自分の気持ちをおさえるほうだ」

各質問項目の回答に対して、「当てはまる」を4点、「やや当てはまる」を3点、「あまり当てはまらない」を2点、「当てはまらない」を1点に得点化し、平均値で比較した。

男女別および年代別の平均値が表4である。また各生活価値観の年代別グラフが図2である。

表4) 生活価値観 (平均)

	自己充足	主体性	伝統志向
全体	3.48	2.52	3.20
男	3.41	2.59	3.32
女	3.55	2.44	3.08

年代	自己充足	主体性	伝統志向
10代	3.77	2.81	3.09
20代	3.46	2.51	3.09
30代	3.55	2.23	3.52
40代	3.44	2.63	3.19
50代	3.13	2.39	3.22
60代	3.34	2.41	3.25

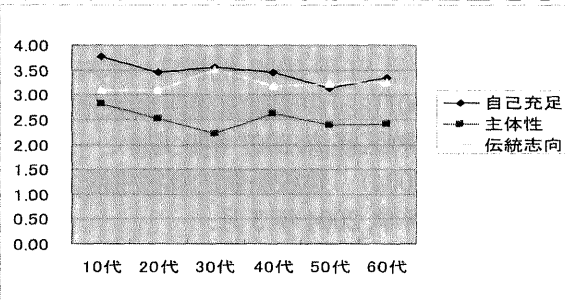


図2) 生活価値観 (年齢別)

全体的な傾向としては、「ぜいたくはできなくとも、気ままに楽しくくらしたい」という自己充足型生活価値観が最も高く、次に「家族がうまくいくためには、自分の気持ちをおさえるほうだ」の伝統志向型生活価値観、「世の中のしきたりと違っても、自分の信念に従って行動するほうだ」の主体性型生活価値観は最も低い値となり、これは男女とも同じような傾向となった。

年代別に比較すると、自己充足型価値観は10歳代で最も高く、年齢が高くなるに従って低くなっている。10歳代と20歳代、50歳代、60歳代との間には5%レベルで統計的にも有意な差がみられた。

主体性型価値観は10歳代が最も高いが、年齢による一元的な傾向はみられない。30歳代が

最も低く、10歳代と30歳代との間に1%レベルの大きな差がみられた。

さらに伝統志向型の価値観では、10歳代20歳代が低く、30歳代が最も高くなっているが、年齢が高くなるに従い得点も高くなる傾向にある。ここでも10歳代、20歳代と30歳代との間に5%レベルで有意な差がみられた。

中国都市部の住民の生活価値観を自己充足、主体性、伝統主義の3つの側面から分析したが、自己充足型価値観も若者を中心に高くなっており、先行研究で指摘した「伝統思想と現代思想の過渡期」であることも読み取れる。

v. 総括

1. 本研究のまとめ

中国は広大な国土と人口を抱えた多民族国家である。現在、大都市と農村部では様々な面で大きな格差や貧富の差があり、人々のライフスタイルも大きな違いがある。本研究では、現代中国人のライフスタイルの現状に関し、先行研究からその特徴を抽出すること、中国において経済発展の最も進んだ沿海地域、寧波慈溪地区住民のライフスタイルを明らかにすることを目的とした。具体的には余暇活動や家族観、宗教観、消費観、生活価値観等の項目を調査し、世代間の違いや現状を明らかにすること、および先行研究の検証を行うことを目的とした。

その結果以下のことが明らかになった。

①余暇活動については、中国沿海地域の人々は様々な余暇活動を行っていることが分かった。日本のデータと比べると、「散歩」や「けいこ事・趣味」の回答が多く、中国人のほうが活動的、積極的な余暇活動をしているといえる。

スポーツの実施状況では、週1日以上定期的にスポーツ参加者は全体で43%で、日本とほとんど同じであった。しかし「ほとんどしない」が35.7%となり、日本より10ポイント以上高く、中国人の二極化を指摘できる。現在、中国でもこのような運動不足による糖尿病などの健康問題が話題となっている。

仕事と余暇のどちらを重視するかの問いでは、若年層ほど余暇重視派が多くなり、社会の発展と共に余暇生活はますます豊かになると予想される。

②中国は5000年の歴史と文化を持つ古い国であり、今日の生活においても伝統的思想やその文化が大きな影響を与えている。伝統的思想や

考え方の代表として、今回の調査では親の扶養と、宗教に対する熱心度、墓参りの頻度の三つの問題を聞いた。

親の扶養については、「親への感謝や愛情の気持ち」が54%で、「義務」が41.8%、「仕方がない」が4.2%となっている。この「親への感謝や愛情の気持ち」は中国の伝統的思想であり、54%の割合は予想より高い結果となった。「義務」の比率と考え合わせると、現在の中国人の思想や考え方はまさに過渡期といえる。宗教に対する熱心度や墓参りの頻度については、予想通り若年層ほど熱心でなかったり、「ほとんど行かない」比率が高い結果となった。約10年前、中国都市部では火葬政策が実施され、墓地が整備された。墓地には管理人が配備され、以前は墓参りの時にやっていた掃除や献花もすべて人任せになってしまった。これも墓参率を下げる原因と考えられる。

若者たちの調査結果から見ると、今後、中国伝統の美德や思想も失われていく傾向もあるといえる。

③消費観について、今回の調査では、ローンの利用と余暇の支出の2つの問題を聞いた。ローンの利用では、「現在利用している」人や「今後利用したい」と考えている人の割合が33.8%、「今後利用したくない」という人が半数以上の53.1%であった。中国ではローンによる消費には批判の声が多く、全体を見ると利用率はまだ高くない。しかし10代、20代の若者を中心に「今後利用したい」とする割合は高くなっており、中国においても今後ローンの利用は確実に増えると予想される。

余暇支出についての気持ちでは、「多少無理してもかまわない」という比率が若年層、中年層で高く、今後ますます余暇が重視されてくると思われる。中国においても、将来、余暇や余暇産業が大きく発展すると予想される。

④生活価値観では、生活での重視項目と伝統主義や自己充足などの生活価値観を調査した。生活重視項目では「家族」を第1位に挙げる者が圧倒的に多く(60.6%)、生活価値観では自己充足型と伝統志向型が年齢によって反比例する結果となった。この結果は、今日の都市部住民は伝統思想の考え方と現代的な思想の考え方がちょうど過渡期であることを示していると考えられる。

2. 今後の課題

今回は中国沿海地域だけの調査となった。しかし中国は多くの人口を抱える多民族国家であり、都鄙間、民族間で様々な格差がある。今後、広範囲にわたる中国人のライフスタイルについて研究したいと考える。

VI. 参考文献

1. 中国の文献

- 1) 于俊如 (2006) 「城市化背景下的農村青年価値観」, 中国青年研究, 2006年2月号.
- 2) 吴雅文 (2004) 「大学生生活価値観的多視角研究」, 肇慶学院学报, 第25卷第4期.
- 3) 龐龍玉 (2006) 「人類生活方式的理論標準」, 甘肅農業, 2006年第2期, 調査研究版.
- 4) 徐長山 (2001) 「論我国生活方式現代化的価値取向」, 青海師範大学大学報 (哲学社会科学版), 2001年第3期.
- 5) 曹卫 (2005) 「論余暇、休閑、体育三者之間的交融」, 体育与科学, 2005年5月第26卷第3期 (总第154期) .
- 6) 刘慧敏 (2005) 「孝親觀念的現代意義」, 理論学刊, 2005年3月第3期 (総第133期) .
- 7) 李金梅 (2001) 「关于[余暇体育]的研究」, 學術广角.
- 8) 李萍 (2007) 「中国貧富差距現状分析与对策研究」, 特区經濟, 2007年9月.
- 9) 趙紅梅 (2004) 「建設斬新的鄉村生活方式」, 湖南社会科学, 2004年3月.
- 10) 宋庭敏 (2003) 「生活方式与居住關係探析」, 中国住宅設施, 2003年8月総第20期.
- 11) 嚴珺 (2007) 「論体育与城市生活方式」, 合肥学院学院 (社会科学版), 2007年9月第24卷第5期.
- 12) 李新明 (2001) 「儒家文化的価値透視」, 學術史研究.
- 13) 李諺和 (2003) 「論現代生活方式」, 寧夏党校学报, 2003年9月第5卷第5期.
- 14) 肖小霞 (2003) 「冲突与融合: 城市生活方式的变迁」, 學術論壇, 2003年第3期 (総第158期) .
- 15) 蔣余輝 (2006) 「慈溪發展の經濟跨越篇—經濟總量四年再造一個新慈溪」 慈溪新聞網 (<http://www.cxnews.cn>)
- 16) <http://riebe.baidu.com>
- 17) <http://zhidao.baidu.com>
- 18) <http://ja.wikipedia.org/>
- 19) <http://www.ilid.cn/>

2. 日本の文献:

- 1) 第一生命経済研究所 (2004) 「日本人のライフスタイル及び生活観等に関する調査研究」.
- 2) 生命保険文化センター・野村総合研究所編 (1980) 「日本人の生活価値観—将来社会展望のために—」, 東洋経済新報社.
- 3) 鮑戸弘 (1989) 「「ゆとり」時代のライフスタイル」, 日本経済新聞社.
- 4) 藤本和延 (2001) 「スポーツ白書 2010」. SSF 笹川スポーツ財団.
- 5) 徐学超 (2006) 「中国都市部中高年齢者の生活史とライフスタイルに関する研究」. 仙台大学院修士論文.
- 6) 張航 (2004) 「中国東北地方・中小都市住民のスポーツの実態と課題に関する研究」. 仙台大学大学院修士論文.
- 7) 社会経済生産性本部 (2008) 「レジャー白書」.
- 8) 丸山富雄 (1989) 「わが国における階層構造とスポーツ参与の研究」. 昭和 62・63 年度文部省科学研究費研究成果報告書.
- 9) 「スポーツライフ・データ (2002)」. SSF 笹川スポーツ財団. 2002 年 12 月 25 日.
- 10) 日下裕弘・丸山富雄 (1988) 「一般成人のスポーツ観に関する研究」, 体育・スポーツ社会学研究 7 : 131-158.